

十二月五日 日曜日

今日は用事があつて、油壺の月光ハウスに並木さんを訪ねる予定にしていた。朝電話したら、早朝の嵐もあつてスケジュールを変更したいと言う。それでいきなり手持無沙汰の日曜日になった。頭も体も、今日は月光ハウスになってしまつていたから切り換えるのが大変だ。こんな時間の空白には得てして懐旧の念やらが入り込み易いぞ、と用心していたら、案の定それが侵入してきた。

こういう手持無沙汰で思い出すのは、佐藤健との恒例になつていた酔庵での忘年会だ。暮も押し迫つた頃、一日、二日、時には三日に渡つて天王台の酔庵に押しかけて、グデグデとした時間を過ごしていた。何をやるではない、朝からビールを飲んで、昼はウイスキーになり、夜は酒になつたりした。何を話していたかは全く思い出せない。思い出せはしないが、よくしゃべつていた。常に笑いが絶えなかつた。近くの真栄寺の馬場昭道も時々顔を見せ、毎日新聞の連中も集まつた。忙しい筈の新聞記者がよくもまあ、あんな時間を過ごせたものだと思う。皆、社会の現実を否応なしに視続けなければならぬ人間達だったので、酔庵のグデグデの数日は良い息抜きになつたのかも知れぬ。あるいは時代の風を良く感じられる人達であつたから、こう言うグデグデの時代になり始めているのを感じ取つていたのだろうか。退屈な日常が延々と続く、チエーホフの小説みたいな世界である。知識人はこういう時間に弱い。アレコレ無駄な事を考えてしまふ。今の百姓は良

く知らぬが、帝制ロシア時代の農奴の日常らしきを想えば、彼等はこの時間耐えるのが、それこそが人生だつたのだから。これは少し大げさな例えだ。私達、消費社会の消費人は実に他愛無く、こんな時間をもて余してしまふ。酒や読書や無駄話に逃避する。

明らかに佐藤健はその生来の資質と見比べるならば仕事をやり残して死んだ。仏教を中心とした日本思想通史を書きたいと酔つて繰り返し続けてもいた。彼ならば、面白く、解りやすくそんな通史を書けたに違いない。

一日ポツカリと空いた時間の空白を私も、もて余している。長い日曜日になつた。庭の草刈りしても、空白は簡単には埋める事ができない。何とかしないと佐藤健の歩いた径を歩き始めている様な気がしないでもない。

十二月六日

十四時柳本君来室。研究室の一期生である。彼は今神奈川で建設会社の社長である。今度宣伝工芸事業に進出したようなので、私も何か仕事を創らねばと考えて、来て貰つた。研究室に在籍した頃は鼻柱の強い前向きな人間だつたが、社長になつてもそれは変わりがなく、頼もしい。

一期生、二期生達は今から考えれば元気があつた。私も体力に限りが無かつたから、ほとんど際限も無く付き合つた。

彼等がこれから社会で何をやってくれるか、楽しみなのだが、それは私の何がしかが、彼等に少しは移植されているだろうという、教師としての自負があるからだ。あんなに長い時間、しかも濃密な時間を共にしたんだから、当然、育つべきなのである。柳

本社長には是非共事業を成功させて、私のところにロールス・ロイスで乗りつけて、ドカーンと事業成功の祝いなんかをやってみせてもらいたい。彼ならできるだろう。今年の四月の私の六〇才の祝いの会では、帰りに一緒に乗った車がドカーンと銀行だったかに玉突き衝突した。あのドカーンはもうイヤだ。今度のドカーンは華やかにやってもらいたい。

ちなみに柳本君の遠州建設は社名をえるはず株式会社と社名変更した。私のところの一期生なので、ごひいきに願いたい。

十二月七日

昨夜から輿が乗って、大沢温泉ホテルの庭、その他のスケッチを続けた。今朝も一つアイデアが生まれてノートに描きつけた。鉄と石と土と瓦と草花を組み合わせたものだ。河原に転がっている丸い石、これは何万年も時間を経た造形で、その姿形には何とも文句のつけようがない。小さな地ぶくれみたいなものを作ってみたい。この仕事はヒョツとすると別に別の世界をのぞかせてくれるものになるかも知れない。十四時前、西伊豆大沢温泉ホテルの依田博之氏にFAXを送附。新しい仕事はどんなものでもワクワクする。これがある限りは大丈夫だろう。